
虫の王者になりました。

水無月 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫の王者になりました。

【Zコード】

N9151W

【作者名】

水無月 皇月

【あらすじ】

星野奈々美は、トラックにひかれて死んでしまった。目が覚めるときの前には老婆がいて、青虫にされた奈々美。虫の王者になれば元の姿に戻れると言われて虫の王者になつたけど元の姿に戻れない奈々美は元の姿に戻ろうと奮闘するが……。虫の王者になつたけど元の姿に戻れない奈々美のお話。

0、青虫になりました

ああ、死ぬんだな。

どんどん迫るトラックを見ながら、そんな事を思つ。
来世は、猫になりたい。

自由気ままな猫になりたい。
あつ、でも、犬もいいかも。

まあ、どっちでもいいや。

そう思つたと同時に、激痛が走つた。

「 つー！」

トラックにはねられ、「ぐうぐう」と転がる。

トラックの運転手め、よくも私を引いてくれたな。
残つた力で、うつすらと目を開ける。

トラックは止まつたが、数秒後、物凄い勢いで走り去つた。

この、クソ野郎！ ひき逃げかよ！

あつ、もう無理。

さよなら、私……。
さよなら。

「おい！ いい加減、起きるー。」

「うるせーなー。」

「もう少し寝かせろ……」

おやすみ。

「寝るなー！」

「うめき声だよー いいじゃないかー！」

ガバリと起き上がり、私を起こそうとするつるさい奴を見る。
私を起こそうとしたのは、黒いローブを着て木の杖を持った老婆
だった。

「誰だよ……」

「やつと起きたか。わしは、魔女じや」

「何言つてんの？ 頭、大丈夫？
はつ、まさか、認知症！？

「認知症ではない！ 魔女じや」

偉そうに胸を張つて腰に手を当てる老婆。

……あれ？

私つて、死んだんじやなかつたつけ？

「それは、わしの力じゃ！」

更に胸を張る婆。

「てか、 じるじるー。」

「 じるは、 アーネルス。 異世界じや。」

異世界……？ じるが？

「お主になじるで、 虫の王者になつてもいいつむ、 し？」

「 せつ、 虫じや。」

婆はそつ言つて、 木の杖を振つた。

木の杖の先が光つたと思えば、 婆が突然でかくなつた。

「虫の王者になれば、 お主の姿を元に戻してやれ！」

元の姿？

えつ、 じゃあ、 今は？

「ほれ、 見てみい！」

婆は大きな鏡を私の前に置いた。

その鏡を見ると、 そこには、 青虫が映つていた。
え、 青虫？

「お母の今の姿は青虫じゃ

おお、結構かわいいじゃん。
青虫もいいかも。

「……とにかく、虫の王者になれ。いいな

あつ、ちょ、待つてよー

婆は木の枝を一振りし、ざこかに消えた。
虫の王者って何？

でも、まあ、青虫かわいいし、いいか。

1、アゲハ蝶に拾われました

りれか、アーティス、アーティス。

地面に生えていた葉っぱを食べながら、これから的事を考える。虫の王者つて、虫の王でしょ？

はつ、無理、ムリ、むり。

そんなめんどくさい」と出来ない。
礼儀作法は出来るナビ かつた

それでも私は、お嬢様なのだ。

幸せではなかつたナゾ。

つまつ、葉っぱつまつま。

「ああ、 いんな所でビハしたの？」
迷子？」

葉ノ子ノ花ノ歌。

「はい、まさか、捨てられたの？ なんてかわいそつなのー！ こんな幼い子を捨てるだなんて、最低よ！ 産むならけやんと、自分で育てなさいよ！」

葉っぱうえ？

自分で育てる？

曲って、卵産んだら終わりじゃないの？

異世界だからなのね！？

道理で——」
「——で、青虫を見かけなかつたのね。

て言うか、どちら様？

残念だけど葉っぱを食べるのをやめ、声がした方を見る。
そこに居たのは、綺麗なアゲハ蝶さん。

「何だ――い!? マイ、ハ――!」

河口のう

「この子、捨てられてたの。私たちで、立派に育てましょう?」

「なんてかわいがりなんだ。やうだね、やうじよひ。ハニー、君は優しいね」

「まあ、ダーリン。優しいだなんて……」

頬(?)に手(?)を当てる、アゲハさん。

ふふ、可愛いなー、ハーハーはー

「そんな」となしね、それより、この子に名前を「けあこ」と

「そうだね、ハーハー」

名前をつけるのは大歓迎だけど、こいつウザい。

「カラリエーヴァなんてどうだい?」

ねつ、中々ここの名前じやないか。

「つぎに、いい奴だな、お前。

「いいわね、ダーリン。初めまして、カラリエーヴァ。私は、ハーリー

えつ、ハーリーって、名前だったの？

「僕は、ダーリン。よろしくね、カラリエーヴァ」

「こいつも……。

まともな名前貰えて、よかつた。

「カラリエーヴァじゃ長いから、エヴァって呼びましょう~」

「そうだね、マイハイー」

「さあ、家に帰りましょう~」

ハーリーさんはそういつと、私を持ちながら飛んだ。

おお、すごい。

ハーリーさん力持ち。

それに比べて、ダーリンは……。

いやつ、それでもなかつた。

ダーリンは、木のツルで編まれている大きめな籠に、大量の葉っぱを乗せながらハーリーさんの横を飛んでいた。

「ごめんよダーリン。

お前の事、馬鹿にして。

「エヴァ、もう少しで着くからね」

そう言つたハニーさんを改めて見る。

そして驚いた。

さつき見たときは、ただのアゲハ蝶だと思ったが、近くで見ると、人の体に羽が生えていたのだ。

人のように、ちゃんと服を着ている。

大きさを蝶だけど。

もしかして、私もこうなるの？

それなら、人に戻らなくていいかも。

「エヴァ、着いたわよ」

ハニーさんはそう言つと、木に開いた穴の中にひらりと入つた。家の中の家具は、ほとんどが木で出来ていて、ソファやカーテンなどは、布などで出来ている。

なぜ、ここに布が？

虫だらけ、お前ら。

しかも木の中に家つて、どうせつて彫つたんだよ。

「ハニーが私たちの家よ、エヴァ」

「よつこい、エヴァ」

不思議がいっぱいだけれど、私がこの生活になれるのは案外早いかもしけれない。

2、サナギになりました

時間が流れるのは早いもので、私が青虫になつてから一年もたつた。
その間は特に何も起こらず、平和だった。

え？ サナギにはならないのかつて？
まだなつてませんよ。ええ。

異世界ですからね。

いつサナギになるかなんて知りませんよ。
ハニーさんやダーリンも教えてくれませんし。
別に、生活するのに困らないからいいんだけど。

「Hヴァ、『ほんの時間』

ハニーさんがそう言いながら葉っぱが盛られた籠を私の前に置いた。

「うー

やつた、飯だぜ。

青虫の姿じや何もできないから、『ほんの時間』が一番の楽しみ。
それ以外の時間はたいてい寝ている。

あ、あと、なんか、うにーつと言えるようになつた。

初めてうにーつと言つた時、ハニーさんとダーリンは大喜びして
いたな。

『ダーリン！ Hヴァが喋つたわ！』『本当か！？ 早いじゃな
いか！ 普通なら一年はかかるのに、一ヶ月で喋るなんて、たすが
エヴァ！』

とか何とか。

えつ、普通なら一年もかかるの！？ タスが異世界……。

なんて思つてしまつた。

「おじしい？ 今日はね、ダーリンが朝早くとつてきてくれた葉よ」

ハニーさんが「口」と微笑みながら言つた。
ダーリン……。見直したよ。

こんなにおじしい葉っぱをとつてくるなんて。
うま！ めつぢやうまい。

「うひ、うひ……」

うまいです。美味しいです。

私がそう言つと、ハニーさんは顔を輝かせて笑みを深めた。

「ダーリン！ ハヴァが美味しいって！」

ハニーさんは椅子に座り、本を呼んでいるダーリンに声をかけた。

「ん？ 何だつて？」

本に夢中だつたダーリンは、ハニーさんにむつ一度聞き返した。

「ハヴァが、美味しいって！」

ハニーさんは、満面の笑みでダーリンにむつ言つた。

「そつか！ それは良かつた！ それを探すのに苦労したんだぞ」

ダーリンも嬉しそうに笑みを浮かべる。

「うーん

ありがと「ゼ」こます。
わざわざこんなおいしい葉をとつてきていただきいて。
とっても美味しい葉だよ。

「どんどん食べて大きくなるんだぞ」

ダーリンは嬉しそうにうなづく。

何!? 私を太らせようとしているのか!?
そ、そりや最近、やけに大きくなつてきてるけど……。
気にしてるんだぞ!
私も乙女だ! 絶対瘦せてやる!

「最近大きくなつてきてるし、そろそろじゃない? ダーリン」

「そうだね。そろそろかな?」

「早いわね、エヴァは。もうこんなに大きくなつて……」

「あつと書つ間だつたね」

ん? どうしたんだ?
そろそろって何が? ねえ、何が?

「うーん?」

「あらエヴァ、気にしなくていいのよ」

「もうだよエヴァ。そのうち分かるから

ハニーさんとダーリンは、悲しそうに微笑みながら言った。
「何があるの？」
「教えてくれたっていいじゃないか！」
「教えてくれよ。」

「うんー」

「大丈夫よエヴァ。心配しないで」

「皆、そうなるんだから」

「皆？ ってことは……何？」

「全くわからん。」

「ああ、お腹一杯でしょ。そろそろ寝なさい」

ハニーさんはそう言つと、私を優しくなでてくれた。
う〜〜、眠い。
わかりました。寝ます。
おやすみなさい。

おはようございます。
つて、あれ?
ここどこ?
何でこんなに暗いの?
まさか、誘拐!?
でも、私なんか攫う人、居ないよね。
いたとしたら変人だ。
ハニーさんー、ダーリーン!
何処にもいないの?
いつもなら、私が呼んだらまっすぐに来てくれるのに……。
たとえ、寝ていようが、外に居ようが。
おかしい。
やけに暖かいし、ぬくぬくしている。
よし、昨日の事を思い出そう。
えっと、『はん食べて、その』はんがめちゃくちゃうまくて、私が大きくなつた事をハニーさんとダーリンが悲しそうにして、そろそろつて何が? つてきいたら誤魔化されて、そんでもつて、寝かしつけられて……。
ん? そろそろつて、これの事じゃない?
でも、何だろう……?
暖かい、真つ暗、あと、狭い。
んー、私は青虫でしょ? つてことは……。
ま、まさか、私、サナギになつたの?
マジか!? しばらく待てば、羽化するんじゃない!?
やつた!
やつと、やつとサナギに……。
ああ、嬉しい。

クソ嬉しい。

それなら、いくらでも待てるな。
よし、とりあえす、寝よう。

おやすみ。

暇だ。

することない。

寝ることしかできない。

何もないし、狭いから動けないし。

嬉しいけど、嬉しいけど……暇だ！！

今何時なのかわからんし、サナギになつてから何日田なのかも分
からん。

ああ、早くこの地獄から出たいな。

3、変化しました（前書き）

更新遅れてしません。ごめんなさい。

3、羽化しました

「この野郎！」

早く破れろ！

繭に向かつて悪態をつくが、何の意味もない。
最近は繭に攻撃もしているが、全然破れない。
サンギになつてから私的に五ヶ月たつた。
それなのに！

何故、羽化できない！！

私、何か悪いことしたつけ……？

ううん、心当たりはないけど。

しようがない、こうなつたら強行突破だ。
繭に体当たり（？）をする。

おつ？

なんか少し明るくなつたぞ？

もう少しだな。

五回ほど体当たりをすると、繭は簡単に破れた。
息をい良く繭を突き破つたため、ぐろぐろと転がる。
うう、眩しい。

暗い繭の中にずつといた私の目にはきつかった。

「ハ、ヴァ？」

うう、その声は、ハニーさん？

閉じていた目をうつすらと開けて後ろを見る。
そこには以前と変わらないハニーさんがいた。

「ハヴァ！ やつと羽化したのね！」

ハニーさんは自分のことのように喜んで私に抱きついてきた。うつ、苦しいです。

「ダーリンに報告しなくちゃ…」

ハニーさんは急に立ち上がり、家から出て行こうとした。

「あつ！ その前に、エヴァに服を着せなきや」

突然止まったハニーさんは、私の手をつかむと寝室に向かった。寝室に行くとハニーさんはクロゼットから白いワンピースを出した。

「エヴァの髪は黒だから、白がいいわね」

「ん？ ぐる、ですと？」

自分の髪を一房持ち上げて見ると、黒だった。

「おお、黒だ！」

「そ、これを着てココに座つて私が帰つてくるまで待つててよ」

椅子を持ってきたハニーさんは急いで外に出て行つた。

私はもらつたワンピースを着ると、大人しく椅子に座つた。

いやー、人間の体は便利ですね。

何といっても、手と足があるのがいい。

人間つて素晴らしい！

けど、下着をはいていないから、物凄くスースーする。

それより、サナギになつてからどれくらい経つたんだろう？
案外、一ヶ月くらいだったりして。

「Hガアー！ ダーリンを連れてきたわよー！」

勢いよくドアを開けたハニーさんの後ろには、ダーリンがいた。これまた以前と変わらない姿だ。

「おお、Hガア、やつと羽化したのか。一年も経ったときは、羽化しないんじやないかと思つたけど、ちゃんと羽化できて良かった」

は？ 一年ですと？

「い、一年？」

「一年と半年だったよな？」

と、ダーリンがハニーさんに聞いた。

「ええ、やつよ」

「や、んなこ……」

五ヶ用くらいだと思つてたのに……。
まさか、そんなに経つているとは。

「それがどうかしたの？ Hガア？」

ハニーさんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「え？ あ、うう。ちょっと驚いただけ」

ハニーさんを安心させるため、二つとまほほ笑む。

「セリフ？ ならいいんだけど」

ハニーさんはホッとした息を吐いた。

「さ、そんなことより、お祝いをしよう！」

ダーリングが提案してきた。

「セリフね、それがいいわ！」

ハニーさんがうれしそうに笑う。

「早速準備しなくちゃ」

嬉しそうなハニーさんを見ていると、自然と笑みがこぼれてきた。

「さ、エヴァ、行きましょ」

嬉しそうなハニーさんに手を引つ張られる。

「うん」

今日、私カラリエーヴァは無事羽化しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151w/>

虫の王者になりました。

2011年12月1日18時54分発行